

1 主 題 生命の尊さ（内容項目3－（1）朝日新聞投書欄）

2 主題設定の理由

医療技術の発達は、私たちの生存時間を飛躍的に延長させた。同時に、技術の高度化は生命に対する倫理的な問題や課題を、投げかけている。中でも臓器移植に関連する脳死判定問題は、「死」に対する概念を大きく変えるという点で、なかなかコンセンサスがとれない課題である。また、現代の中学生はゲームやテレビなどの影響もあり、日常的に「死ね」や「殺す」などの言葉を使うことが多い。本校の生徒も同様であり、死について一面的に捉える傾向が強く、生命の在り方を安易に考えている。

脳死臓器移植について市民としての相反した思いが述べられた新聞投書から、生命とは個人のものということだけではなく、家族や周りの人間との関わりからも考えてさせていきたいと考え、本主題を設定した。

3 ねらい 決して軽々しく扱われるべきではない生命の尊さを深く自覚し、自他の生命を尊重する態度を育成する。

4 資 料 臓器移植に関する2通の朝日新聞投書

5 資料のあらすじ

投書① 臓器移植について学んだ娘の言葉から、我が子の臓器を提供することに対する親としての気持ちから臓器移植に対する複雑な思いに気が付く母親からの投書

投書② 医師として臓器移植の有効性を認めつつ、家族の臓器提供に対する葛藤について、一人の人間としての感情についての投書

6 指導の展開

裏面参照

7 評 価

- ・個人の考えだけでなく、家族や周囲の人間との関わりを考慮して生命や死をとらえることができたか。

	学習活動	発問と留意点
導入	臓器移植についての知識を挙げる。	<p>【導入発問】臓器移植について知っていることはあるか。</p> <p>【留意点】生徒から発言が出ない場合は、教師が簡単に説明し、課題への意識づけとする。</p>
展開	<p>資料を読む</p> <p>高井さんの気持ちを感じ取る。</p> <p>新見さんの気持ちを感じ取る。</p> <p>新見さんの妻の気持ちを考える。</p> <p>両者の意見について比較しながら、「命」について考えを深める。</p>	<p>【基本発問1】高井さんが「娘をドナーにできない」というのはなぜだろう。</p> <p>【留意点】親にとって子どもの命がどれだけ大切なものであるかを理解し、投稿者の気持ちに共感させる。</p> <p>【基本発問2】新見さんが自分の臓器提供には肯定的なのに、妻の臓器提供には否定的なのはなぜだろう。</p> <p>【留意点】医者としての理解と、夫として愛する家族の命を大切に思う気持ちの両方に気づかせ、共感させる。</p> <p>【基本発問3】新見さんの妻がドナーカードを秘密の場所に保管しているのはなぜだろう。</p> <p>【留意点】愛する夫の命にかかわることとして重く受け止めていること、また夫の意思を簡単には受け入れられないでいることにも気づかせたい。</p> <p>【中心発問】二人の投稿者の意見を読んで、「命」についてどのように考えたか。</p> <p>【留意点】投稿者は二人とも相反する気持ちがあることを捉え（高井さん 娘はドナーにしたくないが、亡くなった幼い子に涙した。新見さん 自分は提供するが妻の提供は賛成できない）、すべての考えの根底に「生命尊重」の思いがあることに気づかせたい。</p>
まとめ	文章化	<p>【終末】この時間を通して学んだこと、感じたことをまとめてみよう。</p> <p>【留意点】様々な視点から考えることや、それぞれの人生の段階において多様な考え方があることに留意させる。</p>

朝日新聞投書欄

「娘をドナーに私はできない」

主婦 高井 ゆかり（神奈川県藤沢市 三十八歳）

我が家で先日、小学四年生の娘がドキッとするようなことをいいました。

「ねえ、お母さん。もし、私が脳死になったら、私の臓器を提供する？」

話の内容の重さと、あまりの突然さに、私は絶句してしまいました。

その日、学校で先生から臓器移植の話聞いたというのです。私は思わず娘を抱きしめ、ゆっくりと本音で答えました。

親にとり子供は何よりも大切なもの。脳死というのは、脳の働きが停止し、やがて亡くなるという状態だけど、まだ息をしているし心臓も動いている。そんなあなたから内臓を取り出すなんて、お母さんは出来ない。あなたの体だけでも白雪姫のように取っておきたいくらい、いとおしく、手放せないと思う。同じ大切な家族でも、それが大人なら、ある程度人生を生きて本人の意思があれば、移植も考えられると思う。

あなたは、お母さんよりも先に死んだら絶対に駄目よ、といいながらとても切なかったのは、少し前に海外で心臓移植を待ちながら亡くなった幼い子のニュースに涙したことを思い出したからです。私の考えは狭いのでしょうか。自分勝手でしょうか。

「家族の場合に迷う臓器提供」

医学部講師 新見 正則（東京都板橋区 四十歳）

私のドナーカードを妻は秘密の場所に保管している。私が脳死になった時に、臓器提供に同意するかどうか考えるそうだ。

私はイギリスで五年間、移植医療の現場を見てきた。移植医療は、多くの不治の病の患者さんに再び日常生活を与え、仕事も、スポーツも、そして出産までも可能とする医療である。

しかし、私にも臓器提供を素直に受け入れられないところがある。それは多くの臓器は脳死者から提供されなければならないからだ。最愛の妻が脳死になっても、心臓が止まり体が冷たくなるまで抱擁していただろう。

ところが、家内が移植医療以外に助からなくなれば、ぜひとも移植医療を受けさせたいと願うであろう。その高い成功率を知っているから。

運命を思い病気を素直に受け入れることも一つの方法と思うが、「あげたくない、でも、もらいたい」というのが素直なところか。

もし、私が脳死状態となり、私の臓器がどなたかに新しい人生を与える可能性があるならば、家内には秘密の場所からドナーカードを出して私の臓器提供の意思に同意してほしい。移植に携わった経験から、私は体が温かく心臓は鼓動していても、自分を規定している脳が死んだ状態も死と認めるようになったから。